資　料

広島訪問を終えて
On the Field Trip to Hiroshima

野　村　幸　輝[1]
Koki Nomura

本稿は広島市を訪問した際（二〇二三年一月七日～十一日）の報告である。現在、私はピューリッツァー賞受賞のアメリカ人ジャーナリストで小説家のジョン・ハーシーが著した『ヒロシマ』[2]を研究の対象にしている。これは実在した被爆者の生涯と支援者の平和活動の軌跡を綴ったノンフィクションである。広島訪問の目的は研究の一環としての調査をおこなうためであり、主な用件は二〇一九年四月にリニューアルした広島平和記念資料館を見学すること、作中に登場する被爆者と支援者のうちの計四名に関する未入手の情報を収集すること、そして二名の語り部への聞き取りを実施することだった。訪問地は原爆ドームと爆心地（中区大手町、以下はすべて中区）、広島平和記念公園と広島平和記念資料館（中島町）、本川小学校平和資料館（本川町）、広島流川教会と広島市立幟町小学校（上幟町）、広島平和記念資料館シュモーハウス（江波）などである。本稿では今回おこなった事項のなかから以下の三つを選び、報告する。（一）見学地で得たこと（主なもの二つ）、（二）一人目の語り部のお話、（三）二人目の語り部のお話。

見学地の一つ目は二〇一九年四月にリニューアルされた広島平和記念資料館である。被爆の惨状を示す白黒写真と小さな文字の長文からなるシンプルだったそれまでの構成は、今では原爆投下前から現代までの時の流れのなかに被爆者個人の顔写真と営みと証言と遺品を有機的に、丁寧に織り込んだオーラル・ヒストリー（口述歴史）の絵巻に取って代わっていた。個人に「被爆者」というラベルを貼ることで個人を名前の見えない集団のなかに押し込むのではなく、個人を人として扱い、一人ひとりの人生に焦点を当て、結果的として、似て非なる個々を一本の糸として見せる。見る者は他者の人生のストーリーのなかに招待され、他者の人生のなかに自分の人生との共通点や相違点を見ようとする。もしかすると相違点は被爆の事実のみなのかもしれない。他者の話を自分の

（1）旭川大学経済学部経営経済学科　准教授（英語、アメリカ文学）。お話を聞かせて頂いた山口晴希さんと三登映雄さんの二名にはこの場を借りてお礼を申し上げたい。
（2）四章からなるオリジナル版は一九四六年に、新たに第五章「戦後」を書き加えた増補版は一九八五年に出版された。この作品は二十世紀アメリカ・ジャーナリズムにおける累計販売数で一位を更新している。

話として捉えさせることがこの空間の目指すところなのだろう。見る者は数多あるうちの誰か一人のストーリーに傷つき、記憶し、帰途につく。しばらくは口をきけなくなるかもしれない――私がそうだったように。草の根運動的に民衆のなかに公的記憶（パブリック・メモリー）を根づかせること。達成させるには時間がかかる。しかし確実な方法だ。

見学地として報告する二つ目は日本基督教団広島流川教会である。教会内の壁と廊下には『ヒロシマ』の中心人物である谷本清牧師と、第五章「戦後」に登場する牧師の長女の近藤紘子（こうこ）（旧姓谷本）さんに関する資料と記事が展示されていた。広島市内の被爆者の救援にあたり、戦後は平和運動にも尽力した谷本牧師の資料は揃いつつある。一方、語り部として活発に活動する紘子さんの資料は限られていたので、今回、彼女を特集した地元紙の記事と写真パネルを写真に収めることができたのは幸運なことだった。これらは初めて目にしたものばかりだ。礼拝者の多い日曜日の訪問を避けたため、見学そのものも静かな雰囲気のなかでできた。礼拝堂の前に掲げられている黒焦げの「被爆十字架」も無人のなかで見ることができた。炭化した二本の瓦礫に込めた亡き谷本牧師の人生哲学が憎しみではなく愛であることに、そこであらためて気づかされることになった。

さて、訪問の二つ目の目的は二人の語り部への聞き取りである。一人目はNPO法人Peace Culture Village（平和文化村）（以下、PCVとする）の平和共育事業統括ディレクターを務める二十代の被爆三世、山口晴希（はるき）さんである。PCVの代表を務めるアメリカ人のスティーブン・リーパーさん[3]の著書を読んだことがきっかけで、PCVと山口さんの存在を知ることになった。質問に対する回答のなかから三つ報告する。

（一）被爆一世の親族について――私の母方の祖父が十四歳のときに爆心地から三キロの場所で被爆しました。祖父の妻である祖母は祖父が被爆者であることを知っていましたが、祖父はそのことを私の母親（祖父の娘）と私（孫）には語りませんでした。小学生のとき、私は原爆や被爆について祖父にたずねてみたことがあるのですが、祖父は「もう、おぼえとらん」と言いました。もし被爆者が百人いたとしたら、被爆体験を誰かに話してきた人の数はそのうちの二十人たらずだと思います。被爆者であることを打ち明けると社会から差別され、結婚ができなくなったり、家庭を持てなくなるからです。被爆二世である私の母親でさえ祖父にたずねようとしませんでした。当時、被爆者が自ら進んで話をしないのに、それをこちらから聞くということが被爆者に対して失礼なことであり、とても聞きにくいことだったのではないかと思います。

（二）PCVのゴールと山口さんの役割について――平和団体のなかには核兵器廃絶をゴールにした団体が多い。核兵器反対の「ノー」を訴えれば訴えるほど、逆に、核は必要だ、核を持つことで平

（３）平和運動家、反核運動家、翻訳家。広島平和記念資料館などを運営する広島平和文化センターの元理事長（外国人として初）。

和になれると言う人たちも出てきました。その二つが戦い続けてきたのが戦後の七十七年だったと思います。私たちPCVは戦争の悲惨さを訴えつつ、同時に、自分には何ができるのか、つまり平和を自分ごとにすることを大事にしています。広島を訪れた修学旅行生に、周囲を平和にするために自分にできることとは何かについて考え、発表してもらっています。これは過去を未来につなげる作業であり、平和を自分ごとにすることの一つの例です。また、PCVは、自分さえ強ければいい、自分さえ良ければ人を殺してもいいという考えを「戦争文化」と呼んでいます。これに対し、みんなの幸せを考えたり、一緒に何かを創り出したりすることを「平和文化」(4)と呼んでいます。人と関わるときに、自分の普段の発言や行動から平和を創り出すことが大事。遠回りな方法に聞こえるかもしれないし、とても地道な活動なのですが、PCVはそのような生き方をしたいという人を増やすために活動しています。――この考えを聞いて私（筆者）は、広島市の松井市長が令和四年八月の「平和宣言」のなかでロシアに対して激しく抗議したときのことを思い出した。市長はロシアの文豪による一節を引用し、こう述べた。「他者を威嚇し、その存在をも否定するという行動をしてまで自分中心の考えを貫くことが許されてよいのでしょうか。私たちは、今改めて、『戦争と平和』で知られるトルストイが残した『他人の不幸の上に自分の幸福を築いてはならない。他人の幸福の中にこそ、自分の幸福もあるのだ』という言葉をかみ締めるべきです」（松井）。

（三）原爆を使用したアメリカへの憎しみや復讐心について――私は大学時代からバックパッカーとして世界中を旅してきました。たとえば、スペインに占領された経験を持つ南米の人たちのなかには、いまだにスペイン人を憎んでいる人たちが多いのです。一方、アメリカ人を心から憎んでいる日本人は私のまわりにはいません。日本人はそういうふうにはならなかったんです。どうしてなのか。日本人ならではの考え方、生き方があるのか。憎しみの連鎖をどこかの世代で断ち切らなければならないと思っているのか。それについては自分でもいつか紐解いてみたいと思っています（以上、すべて山口）。――私（筆者）は山口さんの回答を聞いて、被爆者の相談員をしている村田未知子さんのインタビューを思い出した。なぜその仕事を長年続けることができたのかという質問に、村田さんはこう答えた。「たぶん被爆者が好きだから。だって被爆者の人、言いませんよ、ホワイトハウスに原爆落とせって」（村田）。

語り部の二人目は三登映雄（みとひでお）さんである。三登さんは広島平和記念資料館から路面電車で二十分ほど離れた同資料館の別棟となるシュモーハウスでガイドを務めている七十代の男性である。戦後、幼児のときに、住んでいた満州から親の故郷である広島に引き揚げてきたことから、被爆をまぬが

（4）リーパーさんが提唱している考え。これはリーパーさんが元原水禁国民会議議長の森瀧市郎（もりたきいちろう）さんから学んだ考えである。病床に臥す森瀧さんはリーパーさんにこう言ったという。「戦争を止めるためには暴力を止めなければならない。暴力を止めるためには競争をやめなければならず、その競争を止めるためには、愛を育てる必要がある」（リーパー　60）。

れた。シュモーハウスの名はアメリカ人のフロイド・シュモーさんに由来している。シュモーさんは広島と長崎の原爆投下に心を痛め、住居を失った広島市民のために家を建てる活動を進めた人物である。彼はアメリカから三名の友人を引き連れて一九五一年に来日、計四名はこの江波の近所に住んでいた日本人の協力も得て、二十一軒の家を建てた（現在は一軒）。訪問した建物はかつて地域の集会所として使われていたもので、現在はシュモーさんの功績を伝える展示施設となっている。当初、市は一軒だけ残ったこの家を市街地にある資料館へ移設することを考えたが、江波住民の強い要請を受けて移設を断念した。シュモーさんの思いやりの精神と地道な努力は『ヒロシマ』の第五章「戦後」のなかに記されていることもあり、彼の存在は広島市民にはよく知られている。三登さんは展示パネルと展示物、そしてシュモーさんを特集したテレビ番組の映像（これらも初めて目にするものばかりだった）を使い、シュモーさんが遺した足跡を丁寧に、熱を込めて語った。私が注目したのは募金によってシュモーさんがアメリカで集めた金額（現在の価値で一、二〇〇万円）だったが、三登さんが強調したのはそこではなかった。むしろ、日本バッシングや日本人移民排斥運動が戦後のアメリカでまだ続くなか、シュモーさんが歩道で市民からの罵声に耐えながら地道に募金を集めたという部分であった。「こういう人がアメリカにもいたということなんです。本当に感心しました」。逆風が吹くなかにあっても信念を貫こうとする彼の姿は、『ヒロシマ』を発表することで被爆地の惨状をアメリカ中に拡散させたジョン・ハーシーの姿に酷似している。

シュモーさん以外で市の復興に携わった人々についての説明を聞いていたときのこと。自分はサダコさんと同じ小学校の同級生だったと三登さんが口にした。そればかりか、彼はサダコさんと同じリレーの班にいて、彼女と交代でアンカーを務めていたというのだ。私は驚きのあまり耳を疑ってしまった。三登さんは恥ずかしそうに笑みを浮かべたが、大切な友との大切な思い出を語るときに誰もがするような喜びの表情もそこにはあった。「サダコさん」とは、被爆したあと、十二歳の若さで白血病によって亡くなるまで病床で折り鶴を折り続けたストーリー（鶴を一羽折ると命が一日延びる）で知られる、平和公園内の「原爆の子の像」のモデルにもなった佐々木禎子（さだこ）さんのことである。「原爆の子の像」はサダコさんの同級生たちの募金活動によって造像されたものであり、三登さんはその活動を発起し行動した一人であった（シュモーさんの募金活動を想起させる）。私は再び耳を疑った。というのも、私はここ十年あまり、サダコさんの生涯を描いた数種類の作品を愛読し、彼女のお兄さんの家族の平和活動を追ってきたのだ。「最初は、サダコのために、みんなで募金を集めて、小さなお墓みたいなものを作ろうと言っとんたんです。けど、それがあれよあれよという間に全国に広がり、自分たちの手から離れていって、たいへんな規模になってしまいまして」。広島市立幟町小学校六年竹組の運動は全国の子どもたちの運動に発展し、集まった金額は現在の価値で五、四〇〇万円に達した。三登さんは自分のスマホを私に差し出し、六年竹組のリレー選手たちの集合写真を見せてくれた。紙の写真をスマホで撮ったものだ。十人が五人ずつ二列になっている前

列の中央にサダコさんがいる。彼女の右斜め上には中腰になった三登さんがいる。三登さんは秘話を語ってくれた。「みんなでフォークダンスをしたとき、たまたまサダコが僕とペアになったんです。女の子と手をつなぐなんてこと、僕には恥ずかしくて。そうこうしとったら、サダコの方から僕の手を握ったんです。それぐらい活発な子でした」（以上、すべて三登）。サダコさんの左隣りには川野登美子（とみこ）（旧姓横田）さんが写っている。「（運動では）何をやっても女子では、禎ちゃんが一番でした。（中略）特に走りっこが速くって、男子の誰よりも速かったんです」と川野さんは著書のなかで語る（川野）。三登さんが被爆の恐ろしさを肌で感じたのは、彼が中学生のときに同級生たちとサダコさんの病院へお見舞いに行ったときのことだったという。みんなで折ったたくさんの折り鶴を携えていくと、サダコさんがベッドの上に立ち、それを天上から吊るそうとした。そのとき、浮腫んで一面に斑点ができたサダコさんの両足があらわになった。「子どもながらに、あぁ、これが戦争なんだなと思ったことを記憶しています。人には平和が大事だということです」（三登）。

B-29爆撃機「エノラ・ゲイ」の機長を務めるポール・ティベッツ空軍准将が原爆投下の標的にしたのは、T字型が特徴的な相生橋（あいおいばし）だ。その橋から見える三角州の両側には本川と元安川（もとやすかわ）が広がっている。視界の目の前には原爆ドームと平和公園と木々がある。これだけの美しい風景を見るのは何年ぶりだろうと考えた。それからしばらくして、こうも考えた。なぜ、この街は、日本人は、耐え忍ぶことができるのだろう、と。未完成ではあるが、私は私の答えを持っている。これから紐解くと山口さんは言っていたが、彼女はすでに彼女の答えを持っているのではないかと思う。

情感を込めて語ることができる語り部に出会うことがあるが、山口さんも、三登さんも、そのような人であった。二名とも戦争と平和を自分ごととして語っているのだろう。今、別れ際に撮った写真のなかの三登さんの顔を見ると、シュモーさんとサダコさんの顔が見えてくる。録音した山口さんの声を聴くと、彼女の祖父と修学旅行生たちの顔が見えてくる。三登さんはまるで自分の家族を紹介するかのようにシュモーさんとサダコさんについて話した。淀みない語り口にリレー選手のスピードと滑らかさを感じた。一方、熱い思いは山口さんも同じ。大学では幼児教育学を専攻し、幼稚園教諭のキャリアを持っている。ボランティアの経験がある。留学経験もあり、英語を話す。世界中を旅してきた。人が大好きで、人と関わることに長けていることは、会ってすぐにわかった。

二名とも自分たちがよく知る人物の、あるいは自分自身の個人的な話をした。私は彼らの個人的な話に引き込まれた。話のなかに名前があり、顔があり、感情があるからだ。総体について語られた話にはそれがない。ジョン・ハーシーは『ヒロシマ』をこの一文でしめくくっている。「（七十歳をこえた）谷本氏は少しばかり活力が衰えてきていた。谷本氏の記憶も、世界の記憶と同じように、まだらになってきた」（ハーシー　207）。「人間の記憶はいつかまだらになっちまうから、そうなる前に、お前たち、行動しろ！」とハーシーは言いたいのではないだろうかと私はこの一文を読み、

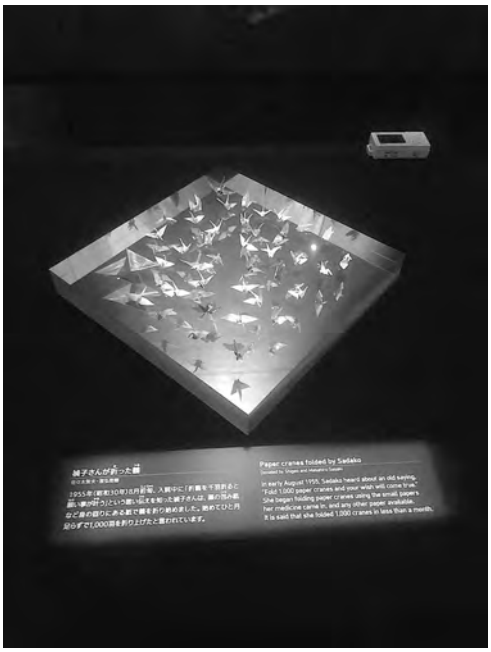
勝手にそう解釈してきた。

山口さんと三登さんの二名から記憶の松明のようなものを手渡されたとも勝手に解釈している。私は松明を誰に手渡すべきなのだろう。おそらく授業や文章という形で、地道に、時間をかけて。広島での人との邂逅を心に刻みながら、今、私はそう考えている。

引用文献

川野登美子『マンガでつづる　原爆の子の像　六年竹組の仲間たち』、有限会社文化評論、2021年。
ハーシー、ジョン『ヒロシマ』〔増補版〕、訳・石川欣一、谷本　清、明田川　融、法政大学出版局、2003年。
松井一實　演説、「平和宣言」（令和四年）、原爆死没者慰霊碑、2022年８月６日。
三登映雄　筆者による聞き取り、広島平和記念資料館シュモーハウス、2023年１月９日。
村田未知子　インタビュー、「被爆者とともに40年～相談員　村田未知子～」、「こころの時代～宗教・人生」（番組）、NHK（Eテレ）、2022年11月25日放送。
山口晴希　筆者による聞き取り、広島平和記念公園内レストハウス二階のピアノカフェ、2023年１月10日。
リーパー、スティーブン『アメリカ人が伝えるヒロシマ――「平和の文化」をつくるために』、岩波ブックレット No. 944、2016年。

原爆投下の標的だった相生橋から見た原爆ドーム



佐々木禎子さんが折った
折り鶴の展示（広島平和記念資料館）

広島流川教会内の黒焦げの「被爆十字架」

広島平和記念資料館シュモーハウスのガイドの三登映雄さんと筆者